

飯島伸子先生の歩みと環境社会学の方法

船橋 晴俊

2001年11月3日早晩、飯島伸子先生が亡くなられた。まだ63歳だった。くしくもその日に気仙沼市で開催された環境社会学会第24回セミナーは、飯島さんへの黙祷を捧げることで開始された。そのあまりにも早い別れは、広く環境問題研究に従事してきた各分野の人々に、大きな喪失感と悲しみを与えた。身近な人との永訣が誰に対してもそうであるように、飯島さんの早逝は、飯島さんと交流しながら環境問題を研究してきた人たちに、人生と学問を見直す機会となった。飯島さんは、日本および世界における環境社会学のパイオニアである。その意味は、道なき道を切り開き、その人の足跡が道になるような先達であるということである。飯島さんの自己形成と研究の歩みから、広い意味での方法から、我々は何を学ぶことができるのだろうか。飯島さんの歩みが教えるものを、研究集団の力、実証性、自生的な理論形成、内面的姿勢という視点からくみ取ってみたい。

飯島さんは1960年3月に九州大学文学部を卒業した後、ただちに研究者の道を歩み始めたのではなく、数年間の会社勤めをしている。飯島さんは『技術史研究』41号（1968年）で、1965年ごろを「いわゆるオフィス・レディであった私」と回顧しているが、そこからいかにして「環境社会学のパイオニア飯島伸子」として自己形成していったのだろうか。1966-67年度の2年間、飯島さんは、東京大学大学院社会学研究科で公害問題を主題に修士論文執筆に取り組み、その成果が認められる形で、1968年4月に博士課程に進学し、そしてすぐ、東京大学医学部保健学科保健社会学講座の助手に採用された。この前後、数年の間に、飯島さんの研究活動は、三つの研究集団に参加する形で進められた。それは、大学院入学前から加わっていた「現代技術史研究会災害分科会」と、修士課程での指導教官であった福武直氏を中心とする地域社会学の研究グループと、保健社会学関係者から成るスモン病研究グループであった。修士論文（1967年）の「あとがき」ならびに『技術史研究』41号の「会員通信」欄の文章は、災害分科会の研究活動が決定的に重要であったこと、またそこでの討議と批判が学問的に真剣で厳しいものであったことを示唆している。修士課程前後の数年間において、これら研究集団の力が自己形成に非常に積極的に作用したことがうかがわれるのである。

研究集団の力が支えになったのは、特にどういう局面においてであったのか。1967年末に提出された修士論文「地域社会と公害」は550枚をこえる力作であるが、その基盤になっているのは、少なくとも7回にわたるフィールドワークである。その対象地域には、静岡県の沼津・三島市、新潟水俣病発生地域、富山県イタイイタイ病発生地域、熊本県水俣市が含まれ、いずれも当時の公害問題の中で非常に重要な諸地域であった。そのうち6回までは、集団によるフ

飯島伸子先生の歩みと環境社会学の方法

フィールドワークであるが、特に災害分科会メンバーとの、三島・沼津、新潟水俣病、イタイイタイ病の調査、並びに単身での熊本水俣病調査が大きな意義を有し、それが修士論文の執筆を支え可能にしている。このような初期の時代から晩年に至るまで、飯島さんは国内および海外の公害・環境問題の現地調査を精力的に行い、徹底的に実証的であった。そして「現地調査こそが醍醐味」と語っていた。

だがそのような調査は、困難や葛藤なしに実施できたわけではない。1991年の夏、青森県むつ小川原開発と核燃料サイクル施設を対象として、東京都立大学飯島研究室、東北大学長谷川研究室、法政大学船橋研究室の共同調査を実施した。5月頃の合同打ち合わせで、飯島さんは法政大学多摩キャンパスに来校し、調査に参加する学生たちを前に、「このような厳しい対立の生じている地域に入って調査をするのは胃が痛くなる思いです」と話していた。また、別の機会に、調査結果の発表が結果的に公害被害者にマイナスに作用してしまったこともあるという後悔に満ちた経験を話してくれたこともあった。それらの数多くの困難や葛藤や苦い思いに耐えながら、数々の調査が実施されてきたのである。

現場での調査と並んで、飯島さんの実証性を支えたのは、1970年ごろからの公害年表の作成作業と、それとセットになった「公害の社会史」研究である。年表作成作業に取り組んだことが、公害問題の本格的研究者としての自己形成にとって重大な意義を持ったことを飯島さん自身が語っている。膨大な資料整理という下積みの作業に長期間取り組み、研究の下準備的作業とも思われがちな年表作成という課題を、一つの作品の完成と言うべき位置にまで高めたのである。それは、新しい方法の確立であると同時に、年表作成という方法が、環境問題研究にとって不可欠であることを先駆的に示すものであった。『公害・労災・職業病年表』（1977年、公害対策技術同友会）の続編を刊行することは、飯島さんの長い間の念願であった。都立大学で教えた院生たちと1990年代半ばからその作業に着手し、最晩年の数ヶ月さらに入院後も、体調不良に抗してこの作業は続けられていた。本格的続編のための準備資料とも言える『環境年表1976-1985』（全236頁）が、飯島伸子編、富士常葉大学環境防災学部飯島伸子研究室発行、少数部の私費印刷という形で完成し、飯島さんの病床に届けられたのは、亡くなられる数日前のことであった。

このように飯島さんは、徹底的に実証的であったが、同時に、環境社会学の研究において、自生的・内発的な理論形成を成し遂げた。飯島さんのフィールドワークは現場への精力的な探訪を重ねるものであるが、一貫して社会学者としての研究方法に導かれているものであり、ジャーナリストの仕事とは異なる社会学者の研究の固有の役割を明確に自覚していた。その意味は、社会学研究者として調査結果をまとめるにあたっては、単なる事実の記述にとどまるのではなく、対象の意義や因果連関を解明するような、洞察力のある理論的視点や概念枠組みを導出する必要があるということである。飯島さんは他の研究者や院生の論文草稿に対して改稿への助言を提出する時や、他の人々の出版物にコメントをする際に、そのような態度を、再三、示していた。

だが飯島さんは、理論が「言葉の遊び」に堕してしまうことに対しては、終始、批判的、警戒的だった。飯島さんの歩みが示しているのは、狭く深い実証的研究を基盤として、理論形成

を成し遂げるという方法である。このような研究方法をとる場合、どのような環境問題に出会い、何を研究対象として選び取るのかということが、その後の理論的な研究の展開を大きく規定する。飯島さんは、1960年代後半と1970年代を通して、水俣病、スモン病、炭塵爆発事件による一酸化炭素中毒問題という深刻な具体的問題と格闘した。これら三つの事例から帰納的に形成されたのが飯島さんの「被害構造論」であり、それは我が国の環境社会学の最初の有力な理論枠組みの創出という大きな意義を有するものである。

日本の社会科学が、いかにして自生的なもの、内発的なものたりうるのかという問いは、多くの人が考えるべき課題であるが、飯島さんの歩みが提示している方法はこれに対する一つの回答を与えている。現実との直面なしに新しい理論を作ろうとしても、理論が出来るものではない。それぞれの時代が提示するそのつどの社会問題に直面すること、そしてそれが新しい対象への出会いを通しての新しい問題設定を可能にする場合、そのような条件こそが、新しい理論枠組みを形成する可能性を提供するのである。

では以上に見てきたような先駆的、創造的な歩みは、いかにして可能だったのだろうか。ここで、狭い意味での研究方法をこえて、より広い意味での人生の歩み方、その中での学問を支える基本的態度のあり方を見つめなければならない。それは、端的に言えば、公害という社会的不正に対する憤激と批判意識、そのような社会問題に正面から取り組み、その現場に踏み込み、学問的解明を果たそうという基本姿勢である。問題関心の中心にあるのは公害や職業病や労災による被害の実態の解明と、そのような被害を生み出す、人間・組織・制度・社会構造のあり方の批判的解明であった。方法の中心にあるのは、公害問題や職業病についての社会調査であり、また被害者・生活者の視点の採用である。

だが、飯島さんが公害研究に取り組み始めたとき、社会学においては、公害研究は確立された領域ではなく、学界で評価される成果に結びつくかはまったく不透明であった。公害研究に打ち込むことは、＜冒険＞であったのである。そのような状況の中での不安や迷いは、修士論文の「あとがき」や先述の「会員通信」に率直に表明されている。しかし、飯島さんは自分の問題感覚に忠実に、周囲のはやりすたれがどうあれ我が道をゆくという姿勢を貫く勇気を持っていた。だがそれは、社会学者の中ではほとんど孤立しながら、一人で、公害年表の作成や各地の調査などの膨大な作業に打ち込むことを要請するものであった。そのような根本的方向づけこそが、パイオニアとしての飯島さんを形成した鍵であるのだろう。それは単なる知性を超えるものである。社会科学の研究が、知性を柱に展開することは言うまでもない。だが、社会的、学問的に有意義な研究成果を創り上げるためには、知性以外の何かが必要である。それは感受性、問題意識、あるいは、思想性と言えるかもしれない。その何かに気づき、それを大切にする、それが、研究の大成には必要なのだ。飯島さんはこの何かを備えていた。研究者どうしの出会いが成立するのは、この何かが共鳴する時なのだろう。

もっとも、このような歩み方は、飯島さんにとっては、そのつどの内面的促しに従って、そのつどの制約条件の中で、本質的に大切と思われる課題をひたすら全力でやり続けたということだったのかもしれない。そこからどのような結果が生まれるかは、他の人にとっても自分にとっても、後から回顧的にのみわかってくるものなのであろう。

飯島伸子先生の歩みと環境社会学の方法

1990年5月の環境社会学研究会の結成は、環境社会学を志す50名余の者がはじめて集まったという点で、飯島さんにとっての新鮮な経験となり、新しい研究の展開を可能にするものとなった。この研究会は参加者に豊富な自己形成の機会を提供し、やがて環境社会学会へと発展する。飯島さんの最後の10年は、環境社会学会の最初の10年にほぼ重なっている。このほぼ10年間の学会の到達水準を反映するかたちで、『講座環境社会学』（全5巻、有斐閣）が、飯島さんの都立大学退任と重なるようにして刊行されたのはまことに象徴的である。だが、飯島さんはこの講座の完結後、ほぼ一ヶ月で亡くなられたのであった。

飯島さんが亡くなられた直後より、『追悼文集』と『研究教育資料集』を作成すると同時に、遺された蔵書・資料類を整理して「飯島伸子文庫」を開設しようという取り組みが、ごく自然な動きとして生まれてきた。飯島さんは、2001年秋までの35年の間に、公害・環境問題を中心とする膨大な蔵書と社会調査資料を収集していた。これらの蔵書資料類は、環境社会学のみならず、我が国の環境問題研究全体の中でもきわめて貴重なものである。それらを散逸させず整理保管し、広く今後の研究と教育に活用できる仕組みを作ることは、飯島さんとの共同研究の機会に恵まれ者たちにとっては、当然取り組むべき課題である。ご遺族、最後の勤務校であった富士常葉大学、環境社会学会の共同研究者グループでの話し合いの結果、富士常葉大学図書館内に「飯島伸子文庫」を設置しようという方針が決定され、そのための取り組み態勢として設置準備委員会が作られた。

文庫開設のための模索を通して判明したのは、日本においては、社会科学系、自然科学系を問わず、有力な研究者が生涯にわたって蓄積した貴重な資料類が、退任や死去とともに頻繁に散逸しているということである。とりわけ、社会調査の原資料類を包摂する形での社会学分野での個人文庫の設立は、なかなか先例が見つからない。労力と経費がかかるけれども短期的な業績には結びつかないようなこうした作業に、日本の学問世界は十分に取り組めていない。しかし、長期的な蓄積と学問的土壌の涵養、その基盤に立った自生的な研究の形成のためには、このような取り組みが必要なのはである。

環境問題の研究領域においては、時代の変遷につれて、新しい知見が集積され、新しい理論が形成されていくであろう。だが、研究を支えるエートスとして必要な姿勢は、どの時代にも共通ではないだろうか。飯島さんの歩みは、自分の問題関心に忠実に、理論形成を志向した実証的方法を長期にわたって堅持することが、自生的・内発的な研究成果を生み出す鍵として、いかに大切かを示している。2002年秋には、多数の人々の協力により、飯島さんの『追悼文集』と『研究教育資料集』が刊行される。本稿での限られた記述よりもはるかに包括的に飯島さんの学問的歩みが提示されるであろう。それは、回想の記録であると同時に、環境社会学の研究方法への示唆を与える貴重な源泉となるはずである。